

吉元昭治著 落語『笑う門』

著者は昨秋、創作落語を引っさげて文芸特集号に登場した。それまでは古代日本の史蹟や伝承地など1200か所を巡つて集大成した『日本全国 神話伝説の旅』や、道教の流れの医学の研究家としての著書の数々を著した碩学の開業医としての認識でした。

ところが、クラブの総会でお会いしたり、原稿を間ににして（医院が同じ小平市内で駅の近く、立ち寄つてお話をしたり、さらには今春の文特号合評会で話合つたりして、著者が極めて気さくな市井人である認識を強めました。ちょうどこの落語集に出てくる「熊さん、八つあん」であつたり、あるときは長屋の大家、商家の若旦那的なキャラクターです。ですから、この“お医者さんの創作落語”的著者としては、何の違和感がない

のも当たり前のことでした。表紙の折込の個所にある惹句というのでしょうか、そこの「敷ならぬ名医が处方する究極の妙薬。妙薬は口を通らず笑いを生ず、名付けて『わらう門』別名「医者いらず」またの名「大菩薩」とあります。

笑つて病を遠ざけるに如くはなし

します。その小判が元で貧乏浪人の上書きに「貧乏の妙薬 金用丸 よろずによし」と記して不幸な妹に渡します。その小判が元で貧乏浪人の仲間が、武士の意地を繰り広げるのですが、それは略、このちよつと洒落つ氣のある医師を著者に重ねました。

実際、生糸の神田育ちで周囲に席亭があつた時代に少年期を過ごした著者は、漸に軽口や洒落を盛るだけではなく、そこここに庶民の人情をも、ちゃんと詰め込んでいます。小噺や都々逸



さらに、病前に覗き見すれば邪

もお楽しみください。

氣鬱氣を払い元気溌溂……と続き、笑つてくぐる福の門、読まなきやそんそん、笑わにやそんそんと囁し立てています。

ここで、評者は太宰治の一文を思い出しました。私の読んだのは新潮文庫に収め

られている『お伽草子』の中の新釀諸国は、盆暮れの掛取りの苦労に耐えられず、ある年の暮れ実家の医師の兄に助力を頼むのですが、兄は小判十枚を紙に包みその上書きに「貧乏の妙薬 金用丸 よろずによし」と記して不幸な妹に渡します。その小判が元で貧乏浪人の仲間が、武士の意地を繰り広げるのですが、それは略、このちよつと洒落つ氣のある医師を著者に重ねました。

実際、生糸の神田育ちで周囲に席亭があつた時代に少年期を過ごした著者は、漸に軽口や洒落を盛るだけではなく、そこここに庶民の人情をも、ちゃんと詰め込んでいます。小噺や都々逸

もお楽しみください。

著者は言います。笑いこそはお互いのコミュニケーションを深める潤滑油……

病は氣から、病をなおすより笑つて病を遠ざけるには如くは無しと。乞う今秋の文特。（勉誠出版・1000円＋税）